

# 原 遺 跡 21

— 第35次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告第1400集

2020

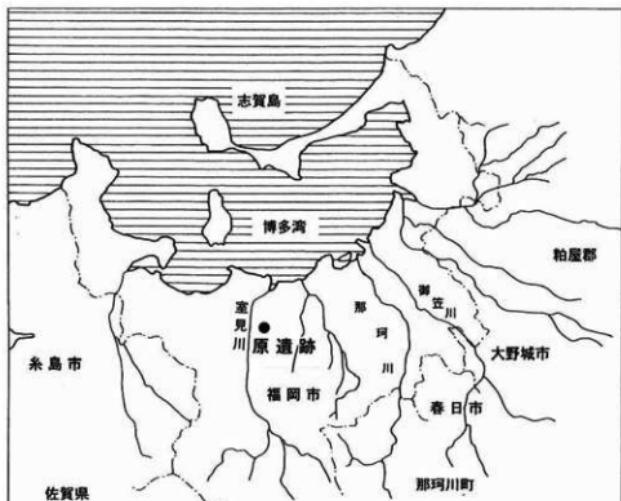
福岡市教育委員会



HARA 遺 跡 21

— 第35次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告第1400集



遺跡略号 HAA-35  
調査番号 1841

2020

福岡市教育委員会



# 序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。市内には埋蔵文化財をはじめとした重要な文化財が数多く残されており、近年の著しい都市化により失われるこれらを後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築に伴う原遺跡第35次発掘調査について報告するものです。この調査では中世の掘立柱建物を検出するとともに、弥生時代の土器が出土しました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社メイケン様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和2年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 星子 明夫

## 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が早良区原8丁目内の共同住宅建設に伴い、平成31（2019）年2月18日から3月8日に発掘調査をした原遺跡第35次調査の報告書である。
2. 遺構の実測・写真撮影は井上蘭子・三浦萌が行った。
3. 遺物の実測は三浦が行った。
4. 遺物の写真撮影は三浦が行った。
5. 製図は三浦が行った。
6. 本書に掲載した方位はすべて縦北である。
7. 本書に掲載した座標は世界測地系である。
8. 本書に使用した遺構略号はSB=掘立柱建物、SK=土坑、SD=溝、SP=柱穴（ピット）である。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
10. 本書の執筆・編集は三浦が行った。

遺跡名	原遺跡	調査次数	35次	調査略号	HAA-35
調査番号	1841	分布地図図幅名	原	遺跡登録番号	0311
申請地面積	287.04m <sup>2</sup>	調査対象面積	121.37m <sup>2</sup>	調査面積	115.18m <sup>2</sup>
調査地	平成31年2月18日～3月8日			事前審査番号	30-2-699
調査期間	福岡市早良区原8丁目1178番7、1178番8				

## 目 次

I. はじめに .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査の組織 .....	1
II. 遺跡の立地と環境 .....	2
1. 地理的環境 .....	2
2. 歴史的環境 .....	2
III. 調査の記録 .....	5
1. 調査の概要 .....	5
2. 遺構と遺物 .....	7
1) 据立柱建物 .....	7
2) 土坑 .....	7
3) 溝 .....	10
4) その他の遺構 .....	15
IV. まとめ .....	16

## 挿 図 目 次

図1 原遺跡周辺の遺跡分布図 .....	3
図2 原遺跡調査区分布図 (1/5000) .....	4
図3 第35次調査区位置図 (1/1000) .....	5
図4 調査区全体図 (1/80) .....	6
図5 SB-37遺構実測図 (1/60) .....	8
図6 SB-38遺構実測図 (1/60) .....	9
図7 SB-37,38出土遺物実測図 (1/3) .....	9
図8 SB-39遺構実測図 (1/40) .....	10
図9 SK-01遺構実測図 (1/40) .....	11
図10 SK-01出土遺物実測図 (1/3) .....	11
図11 SD-02遺構実測図 (1/20) .....	12
図12 SD-02出土遺物実測図 (1/3) .....	12
図13 SD-03,04,05土層ベルト断面図 (1/20) .....	13
図14 SD-05西壁土層図 (1/40) .....	13
図15 SD-03,04,05出土遺物実測図 (1/3) .....	14
図16 ピット遺構出土遺物実測図 (1/3) .....	15
図17 方形区画推測図 (1/1000) .....	16

## 図 版 目 次

図版1 1. 調査区全体 (北から)	2. 調査区全体完掘後 (北から)
図版2 1. SB-37,38全体 (北から)	2. SB-37,38全体完掘後 (北から)
3. SB-39全体完掘後 (北から)	
図版3 1. SK-01完掘 (北から)	2. SK-01南面土層写真 (北から)
3. SD-03完掘 (北から)	4. SD-04完掘 (西から)
5. SD-05完掘 (西から)	6. SD-02完掘及び東面土層写真 (西から)
図版4 1. SD-03土層ベルト (南から)	2. SD-03土層ベルト (南から)
3. SD-04土層ベルト (南から)	4. SD-05土層ベルト (南から)
5. SP-21敷石 (北から)	6. SP-11焼土 (南から)
図版5 1. SP-35焼土 (北から)	2. 35次調査出土遺物写真

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成30（2018）年10月22日付けで、福岡市早良区原8丁目1178番7、1178番8（敷地面積：287.04m<sup>2</sup>）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、株式会社マイケンより福岡市教育委員会宛てになされた（事前審査番号：30-2-699）。

これを受けて経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である原遺跡に含まれていることから、平成30年11月8日に工区内の一部において試掘調査を実施した。調査の結果、現地表下110cmにおいて遺構を確認したため、申請者と協議を重ねた結果、発掘調査を実施することとなった。

本調査は平成31年2月18日～3月8日まで行い、報告書作成の整理作業は平成31年度および令和元年度に行なった。

## 2. 調査の組織

調査委託：株式会社 メイケン

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成30年度）

調査総括：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長 大庭康時（当時）

同課調査第2係長 大塚紀宜

庶務： 文化財活用課管理調整係 松原加奈枝

事前審査： 埋蔵文化財課事前審査係 山本晃平

調査担当： 埋蔵文化財課調査第2係主任文化財主事 井上蘭子（当時）

同係文化財主事 三浦 莉

（整理・報告：平成31年度・令和元年度）

整理・報告総括：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長 菅波正人

同課調査第2係長 大塚紀宜

整理・報告庶務： 文化財活用課管理調整係 松原加奈枝

整理・報告担当： 埋蔵文化財課調査第2係文化財主事 三浦 莉

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

玄界灘と背振・三郡山系に挟まれた福岡市には、糟屋、福岡、早良、今宿の4つの平野が広がっている。今回報告する原遺跡は、そのうちの一つである早良平野の中央を流れる室見川、その中流の東岸に位置する。遺跡は金屑川と油山川に挟まれた2本の自然堤防とその中央部の低地上に立地しており、油山川側である東の微高地を微高地A、金屑川側である西の微高地を微高地Bとして区別している。

なお、近隣の遺跡としては油山川を挟んで東側に原東遺跡が、金屑川を挟んで西側に有田遺跡群が存在している。

### 2. 歴史的環境

原遺跡は旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている複合遺跡である。旧石器・繩文時代の明確な遺構は確認されていないものの、これまでの調査において剥片石器や石鏃といった遺物が確認されている。弥生時代は前期から中期にかけての遺構が主に確認されている。の中でも集落跡等といった主な遺構は第5・8・14・16・17・20・26・28・33次調査といった微高地A上で行われた調査で確認されている。また低地部で行われた第1次調査や第3次調査では水田遺構や水路などが発見されている。古墳時代は前期の遺構が第3・9・22次調査で、後期以降のものが微高地B上で行われた第23・34次調査で確認されている。古代の遺構としては主として第10次調査で発見された官道の側溝がある。この側溝は古代早良郡の条理地割に一致しており、西にある有田遺跡群の溝とつながる可能性が指摘されている。中世の遺構は中世前期（12世紀から14世紀）と後期（15世紀から16世紀）の2時期に大別することが可能である。中世前期は微高地Bの北側と微高地A、後期は主に微高地Bの中央部南側で確認されている。中世前期の遺構は主に第2・4・5・6・10・14・26次調査で確認されている。この時期の集落は東西の微高地で3か所のまとまりがあり、いずれも掘立柱建物を中心とした屋敷地が検出されている。中世後期の時期には、微高地Bの中央部南側で行われた第9・22・25・27次調査において方形に大溝がめぐらされた館跡が確認されており、溝の時期が2時期にわかれることから、館の拡張が指摘されている。また当時の名主であった金丸氏との関連も指摘されている。今回報告する第35次調査地はこの推定されている方形館跡の中央部西側に位置する。また微高地A中央で行われた第12・16・28・32次調査においても区画溝と考えられる溝が確認されている。

山崎龍雄2016「中世3 原遺跡」『福岡市史』福岡市史編集委員会



1. 原遺跡 2. 原東遺跡 3. 有田遺跡群 4. 次郎丸遺跡 5. 次郎丸高石遺跡  
6. 免遺跡 7. 田村遺跡 8. 野芥大藪遺跡 9. 野芥遺跡 10. 飯倉日遺跡  
11. クエゾノ遺跡 12. 飯倉A～G遺跡 13. 藤崎遺跡 14. 西新町遺跡

図1. 原遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25000)

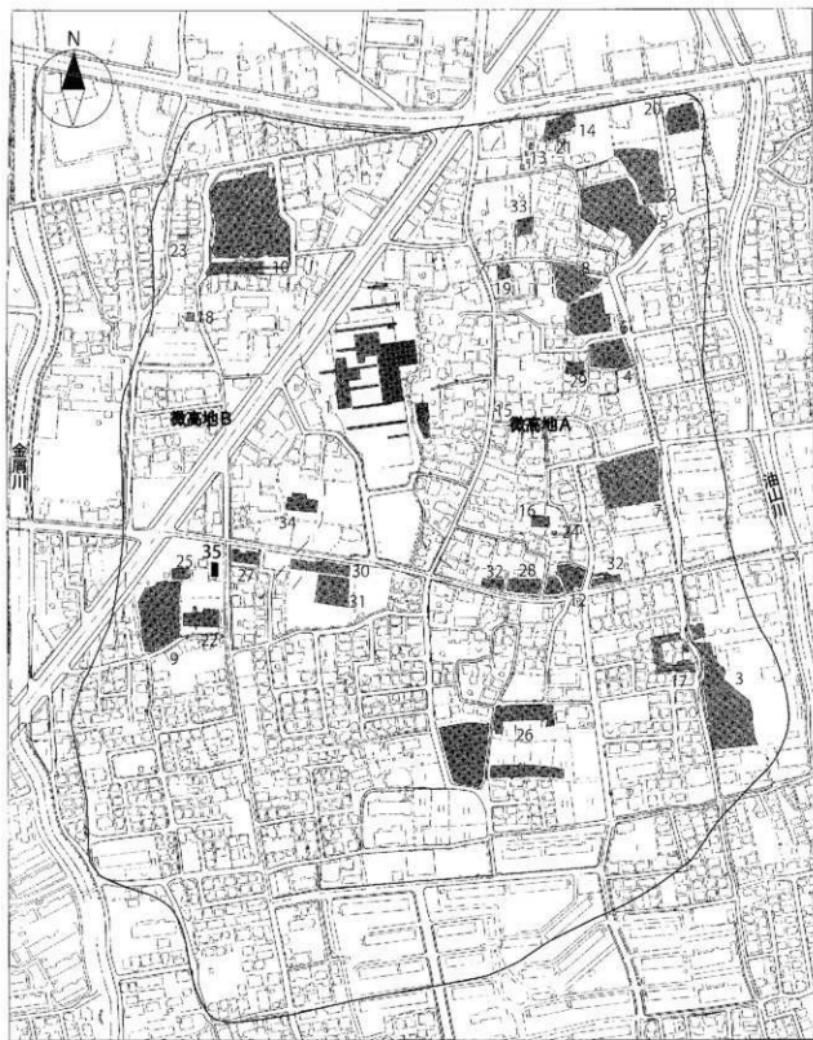


図2. 原遺跡調査区分布図 (1/5000)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

今回報告する原遺跡第35次調査区は、早良区原8丁目1178番7、1178番8に所在し、同遺跡の西部のほぼ中央に位置している。前章で述べた微高地Bの南側に立地している。近隣の調査としては、調査区の南西部で第9次調査、南部で第22次調査、西部で第25次調査、北東部で第27次調査が行われている。

調査区の土層について述べる。本調査区では表土から約0.75～0.8mの盛土が行われており、その下に約0.25mの水田層がみられる。今回遺構面とした暗褐色砂質土は標高6.6～6.7mにおいて検出された。調査区の土層に関してはSD-05の土層図（図14）を参照されたい。

発掘調査は、当該工事の地下へ影響が及ぶ121.37mを対象とした。地表面7.8mから約110cmで遺構面が確認され、この上面までの表土の取り除きおよび場外搬出を事業主側で行った後、人力で遺構の検出及び掘削、遺構実測、写真撮影を行った。発掘調査は平成31年2月18日に開始し、同年3月8日に終了している。

本調査区で検出された遺構は掘立柱建物が3棟、土坑1基、溝4条、柱穴多数である。出土遺物等からほとんどが中世の遺構であると考えられるが、溝3条のみは弥生時代の遺構である。また大溝は北東部で行われた第27次調査において検出された大溝の延長部である可能性が高い。これまでの周辺の調査において中世の方形居館の存在が指摘されており、本調査において発見された遺構もその一部である可能性が非常に高い。

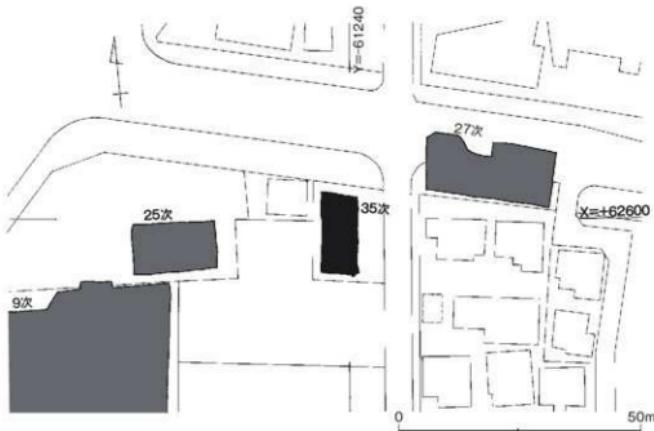


図3. 第35次調査区位置図 (1/1000)

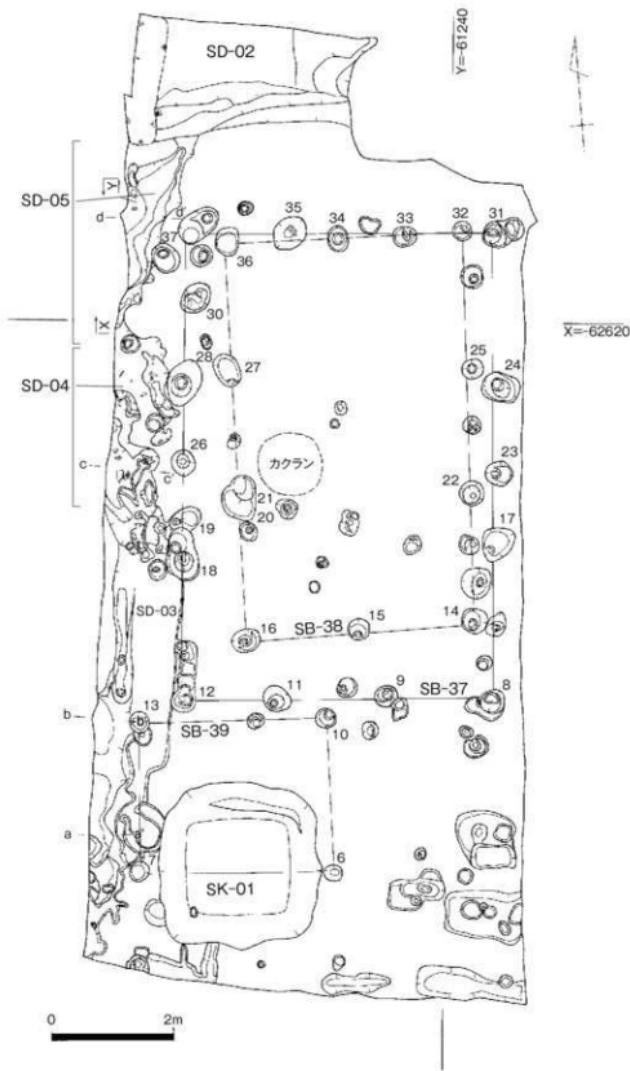


図4. 調査区全体図 (1/80)

## 2. 遺構と遺物

### 1) 掘立柱建物

調査区中央部と南部において掘立柱建物が3棟確認できた。

SB-37 (遺構: 図5、遺物: 図7、図版: 2-1・2)

調査区中央部において発見されたSP-08、09、11、12、17、18、23、24、26、28、31、33、35、37から構成される3間×4間の5.1m×7.6mの建物である。方位はN-7°-Eである。他の柱間に比べ東西柱列の中央3柱の間隔が狭いことが特徴である。SP-11とSP-35において焼土が検出されている。SD-02から出土した土鍋片とSP-28から出土した土鍋片が接合したことから、SB-37はSD-02と同時期の遺構であるといえる。

#### 出土遺物

1と2は土鍋であり、双方ともにSP-28から出土した。1は口縁部片である。外面全面に薄く煤が付着している。外面調整はヨコナデ、内面調整はナデである。2も口縁部片である。外面全面に煤が付着している。外面調整はヨコナデ、内面調整はナデである。1と2は接合しなかったものの、同一個体の可能性がある。

SB-38 (遺構: 図6、遺物: 図7、図版: 2-1・2)

調査区中央部においてSB-37に内包されるような形で検出された2間×3間の3.8m×6.5mの建物である。方位はN-5°-Eである。SP-14、15、16、21、22、25、27、32、34、36で構成されている。SP-21において敷石が確認された。

#### 出土遺物

3は土師器の底部片である。復元した底部径は9.8cm。底部調整は不明瞭である。

SB-39 (遺構: 図8、図版: 2-3)

調査区南部において発見されたSP-06、07、10、13から構成される1間×1間の3.3m×2.7mの建物である。方位はN-7°-Eである。柱の間隔から調査区外南部および西部に延長部が存在する可能性がある。SK-01との前後関係は不明である。

図化できる出土遺物はないが、外面に蓮弁のある中世の白磁が出土している。

## 2) 土坑

調査区南部において土坑が1基確認されている。

SK-01 (遺構: 図9、遺物: 図10、図版: 3-1・2)

調査区南部において発見されたおよそ2.8m×2.8m、深さ0.6～0.7mのはば正方形をとる方形土坑である。断面は逆台形をとり、底面はほぼ平面であると言ってよい。一気に埋め戻されたものと考えられる。

#### 出土遺物

4と5は土師皿である。4は復元で口径8.6cm、底部径6.8cmである。5は復元で口径11.0cm、底部径8.8cmである。両者ともに底部に糸切がみられる。6は白磁皿である。復元した底部径は5.6cm。内面全体に施釉されており、底面に施釉は認められない。白磁V期と考えられる。7は備前系の播鉢である。時期は15～16世紀のものである。8は土鍋の口縁部片である。内面調整はヨコハケ。9は弥生土器の底部片である。復元した底部径は7.9cm。

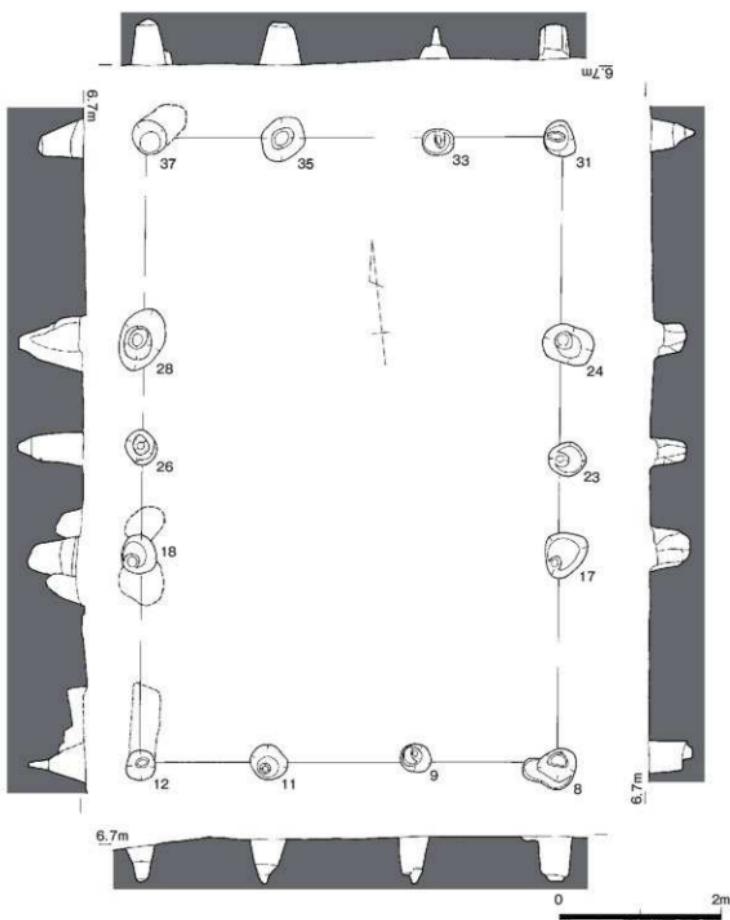


図5. SB-37遺構実測図 (1/60)

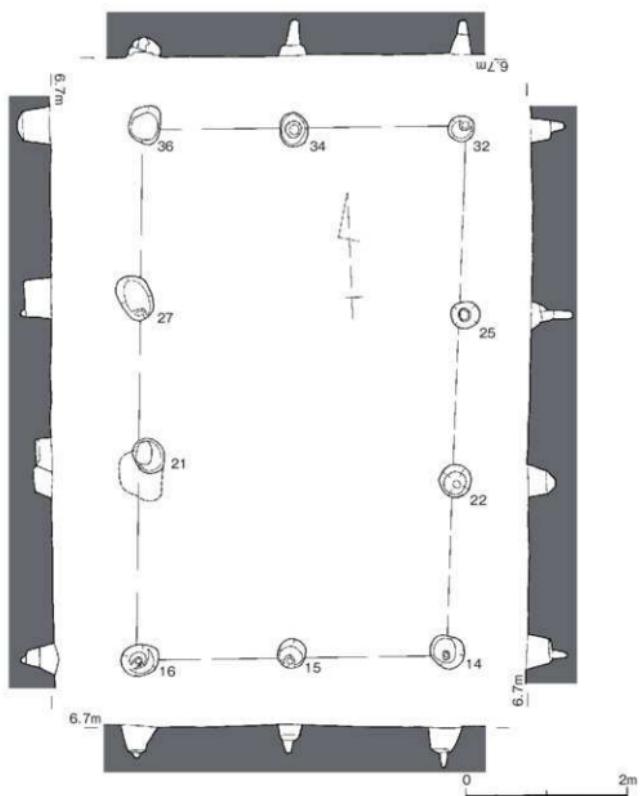


図6. SB-38遺構実測図 (1/60)

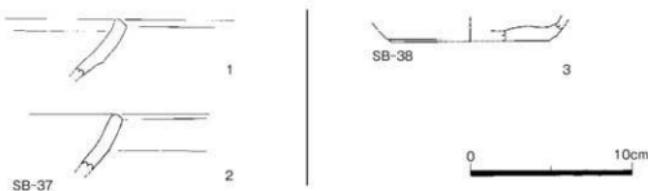


図7. SB-37,38出土遺物実測図 (1/3)

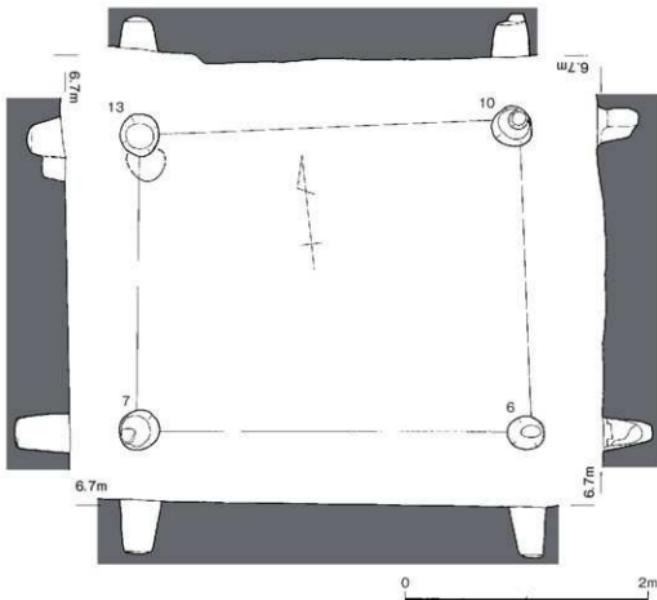


図8. SB-39遺構実測図 (1/40)

### 3) 溝

溝は全部で4条確認されている。うちSD-02以外は弥生時代のものであり、自然流路の可能性が高い。SD-02は北側の、SD-03, 04, 05は西側にあたる溝の肩がそれぞれ検出できていない。

#### SD-02 (遺構: 図11、遺物: 図12、図版: 3-5・6)

調査区北部において発見された溝である。埋土の深さは一番深いところで0.8mとなる。北端部が未検出であるため幅は不明だが、推定2~3mと考えられる。出土遺物から早くても14世紀から16世紀のものであるとみられる。また時期やその規模、位置から考えて、調査区西北部において行われた第27次調査で発見されたSD001の延長部である可能性が高い。

#### 出土遺物

土鍋が2点出土している。10は復元で口径28.6cmをはかる。土鍋の体部から口縁部にかけてほぼ直線的な形をとる。内面調整はヨコハケ、外側調整は口縁部付近がケズリ、また口縁部以下には不明瞭だがタテハケがみられる。外面に煤が付着している。11は復元で口径30.6cmをはかる。体部から口縁部にかけてわずかに屈曲しており、内面調整は丁寧なヨコハケである。外面に煤が付着している。また前述したように、SB-38を構成するSP-28から出土した破片と接合していることから、SD-02とSB-38は同時代の遺構であると考えられる。

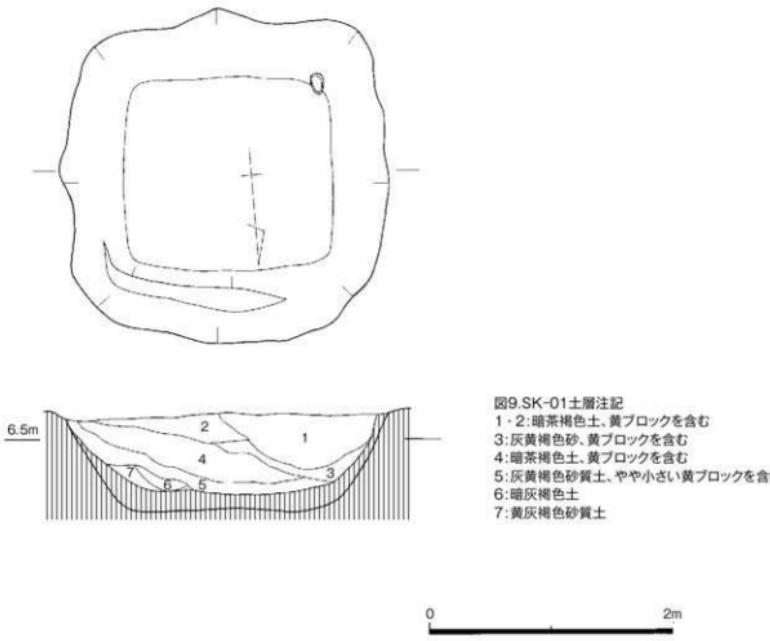


図9. SK-01遺構実測図 (1/40)

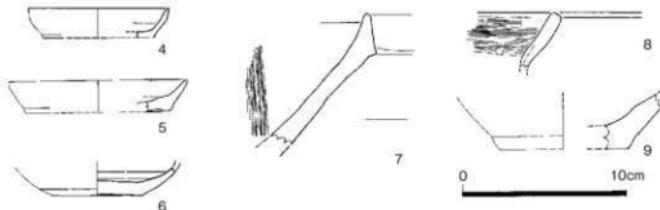


図10. SK-01出土遺物実測図 (1/30)

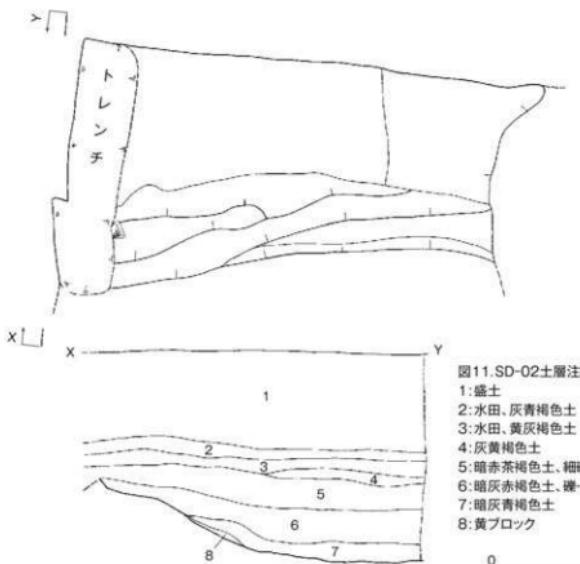


図11. SD-02遺構実測図 (1/20)

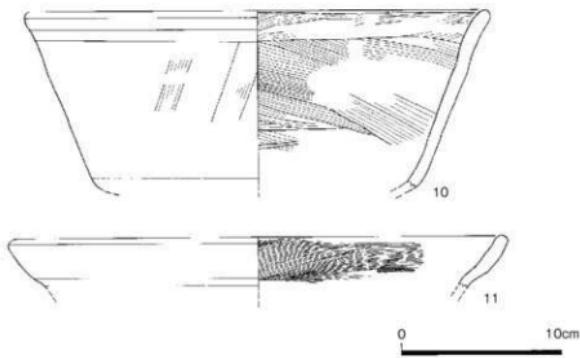
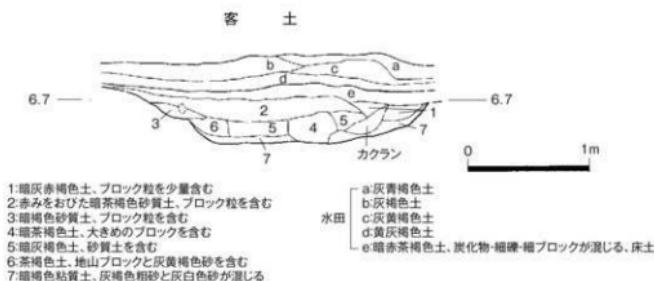
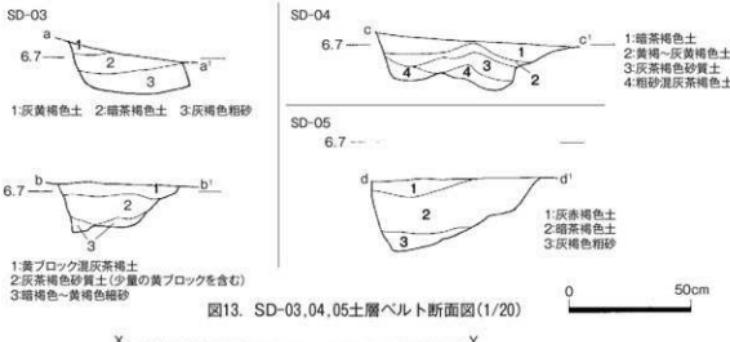


図12. SD-02出土遺物実測図 (1/3)



#### SD-03 (構造: 図13、遺物: 図14、図版: 3-3、4-1・2)

調査区西南部において発見された溝である。深さ16cm。SD-04、05に比べて浅い。

#### 出土遺物

弥生土器が2点確認された。12と13はともに弥生土器の口縁部破片であり、ともに「く」の字に屈曲する形をとっている。12は外面内面調整とともにナデ。13は外面調整ナデ、内面調整は口縁部下部にヨコハケがみられるものの不明瞭である。

#### SD-04 (構造: 図13、遺物: 図14、図版: 3-4、4-3)

調査区西側中央において発見された溝である。深さ18cmである。

#### 出土遺物

弥生土器が多数確認された。14は口縁部破片である。外面内面調整とともにナデ。15は壺の口縁～頸部の破片である。外面内面調整とともにナデ。16は壺の頸部の破片である。最大径33.3cmで外面内面調整とともにナデ。17～19は底部片である。17は復元底径6.4cmで外面調整タテハケ、内面調整ナデ。18は復元底径6.9cm。19は復元底径6.6cmで外面調整タテハケであり、内面に黒斑がみられる。

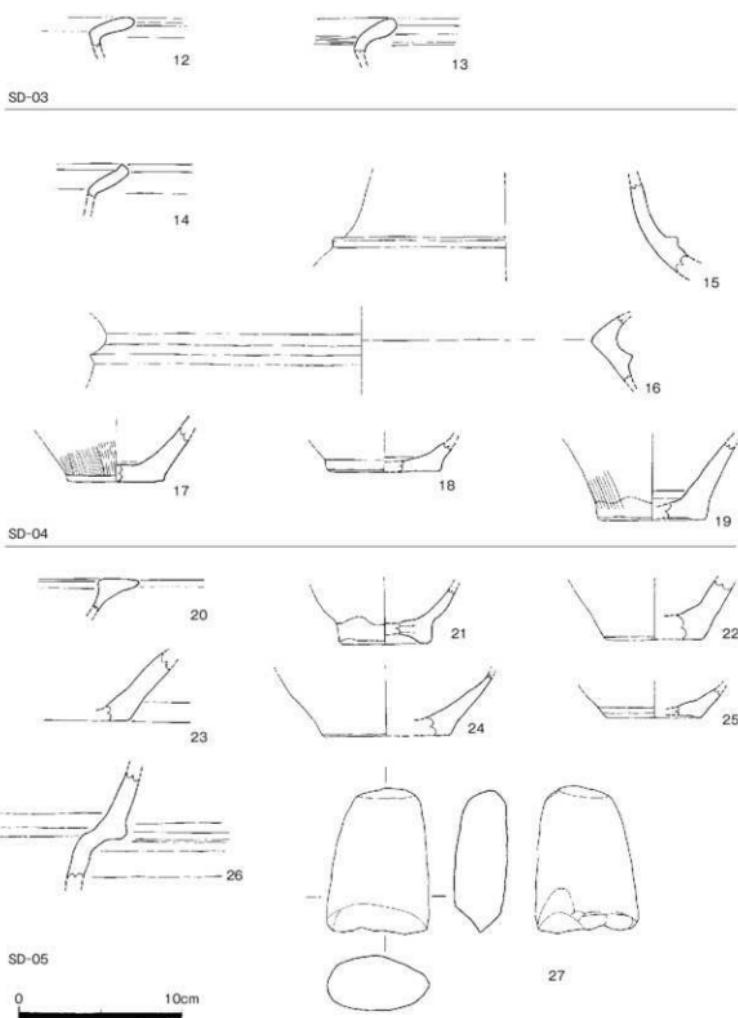


図15. SD-03,04,05出土遺物実測図(1/3)

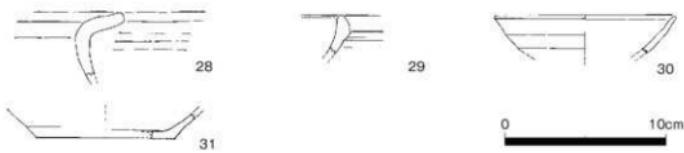


図16. ピット遺構出土遺物実測図（1/3）

#### SD-05（遺構：図13、遺物：図14、図版：3-5、4-4）

調査区北西部において発見された溝である。深さ30cmであり、北部をSD-02にきられる。

##### 出土遺物

弥生土器が多数と石斧が確認された。20～25は弥生土器であり、20は口縁部破片である。若干の鋤先状を呈す。21～25は底部片であり、図は全て復元している。このうち21は無文土器の底部であると考えられ、断面に粘土の接合痕がみられる。復元底径5.2cm。そのほかは中期の須玖式のものとみられる。22は須玖I式と思われる底部片。復元底径5.9cm。23は破片であり、復元に至らなかつた。24も底部片であり、復元底径7.4cm。25は復元底径5.8cm。他の底部片にくらべ底部の厚さが薄い。26は二重口縁壺の頸部であり、時期は古墳時代初期である。調整は内外面共にナデ。27は磨製石斧であり、長さ8.9cm、幅6.3cm、厚さ3.3cmである。石斧を再加工している過程のものであると考えられる。石材は安山岩である。時期は弥生早期といえよう。

#### 4) その他の遺物（遺物：図15）

ここではピット4基から出土した遺物について述べる。

28は弥生土器の口縁部の破片であり、調査区西側のSP-29から出土した。29は白磁碗IV類の口縁部の破片であり、時期は白磁IV期である。調査区西側のSP-19から出土している。30は瓦器小椀の破片である。調査区西側にあるSP-30から出土した。復元口径11cm。31は土師器壺の底部片であり、調査区西側において確認されたSP-20から出土した。底部径は復元で8.4cmであり、糸切痕がある。

## IV. まとめ

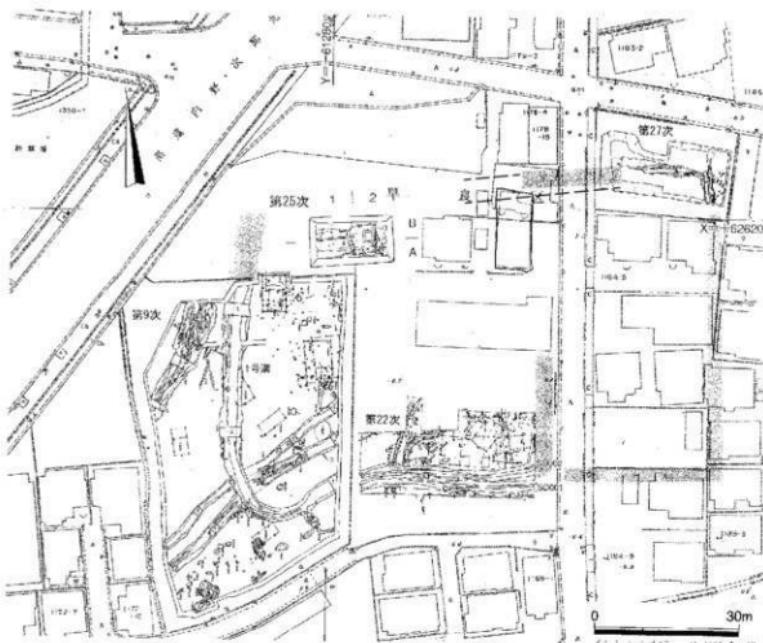


図17. 方形区画溝復元図（『原遺跡15』より一部改変）(1/1000)

今回の調査では主に弥生時代と中世の遺構や遺物が発見された。特に調査区北側で発見されたSD-02は出土した備前系播鉢の時期やその位置から、27次調査において発見されたSD001の延長部である可能性が非常に高い。また今回発見された掘立柱建物は、出土遺物からSD-02と同時期ものであると考えられる。当調査区周辺では前述したように第9次・第22次・第25次・第27次調査が行われており、中世後期の方形にめぐる大溝とその内部に建物を伴う館跡が検出されている。本調査で発見された大溝と掘立柱建物もその館の方形区画溝の一部と、それに伴う建物群であるといえよう。

### 【参考文献】

- ・宮崎亮一編2000「太宰府条坊跡X V—陶磁器分類編」太宰府市の文化財第49集
- ・山崎龍雄2012「3. まとめ」『原遺跡15—第27次調査報告』福岡市教育委員会
- ・山崎龍雄2016「中世3 原遺跡」『福岡市史』福岡市史編集委員会
- ・山本信夫・山村信榮1997「中世食器の地域性—[10]九州・南西諸島」『中世食文化の基礎的研究』国立民俗博物館研究報告第71集

# 図 版



図版 1



1. 調査区全体（北から）



2. 調査区全体完掘後（北から）



1. SB-37,38全体（北から）



2. SB-37,38全体完掘後（北から）



3. SB-39全体完掘後（北から）

### 図版 3



1. SK-01完掘（北から）



2. SK-01南面土層写真（北から）



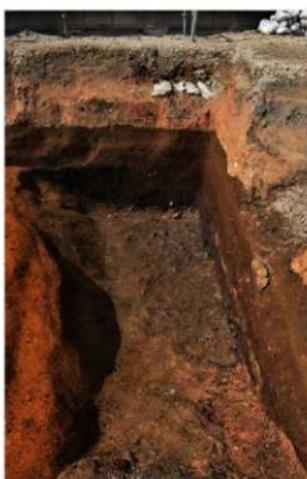
3. SD-03完掘（北から）



4. SD-04完掘（西から）



5. SD-05完掘（西から）



6. SD-02完掘及び東面土層写真（西から）

図版 4



1. SD-03土層ベルト（南から）



2. SD-03土層ベルト（南から）



3. SD-04土層ベルト（南から）



4. SD-05土層ベルト（南から）



5. SP-21敷石（北から）



6. SP-11焼土（南から）

図版 5



1. SP-35焼土（北から）



2. 35次調査出土遺物写真

## 報告書抄録

ふりがな	はらいせき21							
書名	原遺跡21							
副書名	—第35次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1400集							
編著者名	三浦 萌							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8620 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2020年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はらいせき 原遺跡	ふくおかけん 福岡県 ふくおかし 早良区 はらわく 原8丁目地内	40137	0311	33° 33' 46"	130° 20' 26"	20190218 ～ 20190308	115.18m <sup>2</sup>	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
原遺跡	集落	弥生時代 ・ 中世	掘立柱建物、溝、 土坑、柱穴		弥生土器・土師器・ 白磁・土鍋・擂鉢		近隣調査区にお いて発見された 溝の延長部を 検出	
要約	原遺跡は旧石器時代から中近世にわたる複合遺跡である。当遺跡は早良平野を流れる室見川中流の東岸、金屑川と油山川に挟まれた位置にある。金屑川と油山川それぞれに沿って自然堤防が形成されており、その上に遺跡は立地している。 本調査地は原遺跡の西側に位置し、過去の周辺調査において15世紀～16世紀における方形にめぐる大溝と、その内部に建物を伴う館跡が検出されている。今回の調査では方形土坑が1基、掘立柱建物群、調査区北壁にかかった大溝、土坑などが確認された。このうち大溝から土鍋片や擂鉢片が出土しており、時期は中世後半であると思われる。この大溝は北東側で行われた第27次調査にて検出された大溝の延長であると考えられ、今回発見した大溝と掘立柱建物跡も過去の調査にて発見されている方形館跡に関連するものである可能性が高い。							

## はら 原 遺 跡 21

—第35次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1400集

2020年（令和2年）3月25日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 魚住印刷  
福岡市博多区大博町8-20

